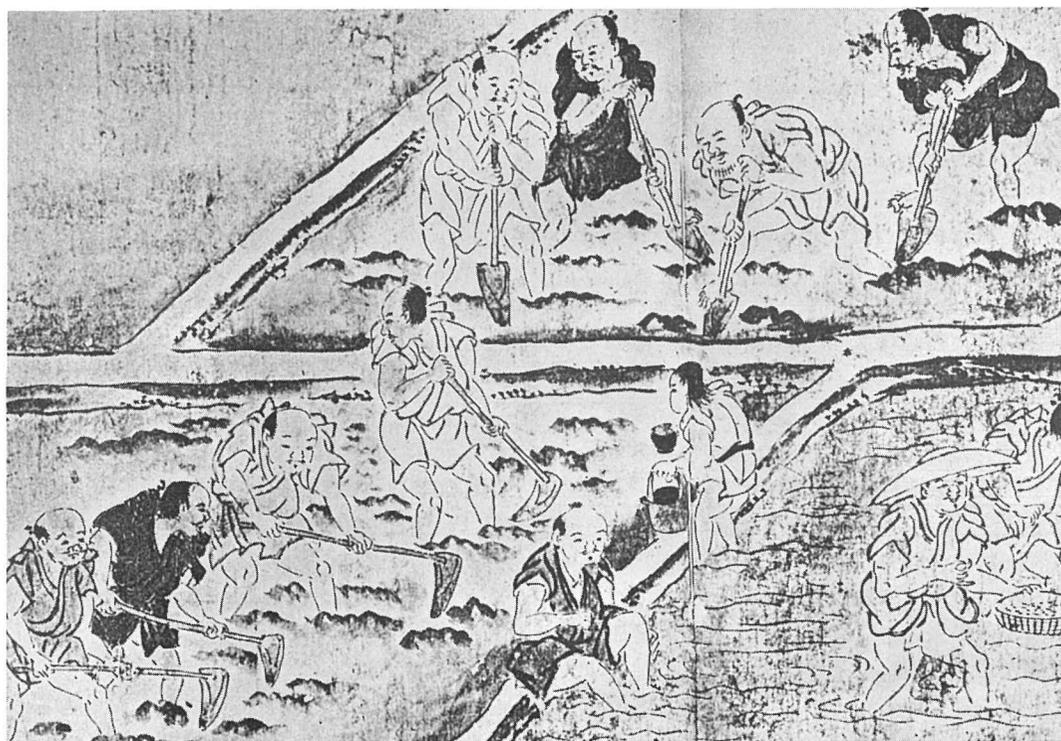


民俗博物館だより

Vol. IX No. 1

1982. 6. 15



▲ 田起しの農具(「たはらかさね耕作絵巻」)

目 次

公園・民家そして博物館への雑感 —見学者からのメッセージ—	1
屋根葺道具(その1) —とくに枌板葺の諸道具を中心に—	3
レンゾとオコモリ (大和の民俗行事②7)	5
芋 績 み(民俗資料調査抄報⑬)	7
お知らせ・他	7

公園・民家そして博物館への雑感 当館編

— 入館者からのメッセージ —

民俗公園に来て、民家を、そして博物館を見学した人たちからのメッセージが沢山寄せられています。見学者の多くのメッセージから、現在の民俗公園、民家そして博物館の立場が客観的にみることができるように思える。一人よがりな考えで、公園、民家そして博物館が進んでいくのではなく、多くの人たちの貴重な声を聴きながら一步一步前進していく方向を辿りたいと常に考えている。

このような意図で、公園に、民家に、そして博物館に立寄った人々の雑感＝メッセージのいくつかをここに紹介することにしました。

この雑感の紹介にあたっては、見学者の方々の思うままの気持が文章に表わされていることに留意し、原文のまま掲載したことをお断りすると共に、長文に亘るもので一部（後半）割愛したことも併せて、ここに明示いたします。さらに、個々人の雑感を尊重する意図で見学者のご芳名と在住地も付記いたしました。

昭和56年11月8日 名古屋市（田中氏）
素材なものは失なわれてからのみ価値がわかるのは悲しいかな！

昭和56年11月8日 名古屋市（福沢氏）
小寒い秋の日、やっとたどりつきました。もしこんなところで育っていたら、どんな人間になっていたか……。そんなことを考えるとぜひ住んでみたいと思いました。

昭和56年11月15日 大和郡山市（水富氏）
小春日和の日曜日、暖かさにさそわれてブラブラ出かけて来た。この博物館には、何度か足を運んできたが、ここまで入ったのは初めて。まず、遠くから見て藁ぶきの大きな屋根におどろき、聞いてはいたが、クギは一本も使わず、縄だけで組まれたその構造に2度も驚き、かまどの天井はすす抜き竹やらい、合理的な間取り（現在の住まいとしては、そうでないかも知れないが）に3度目、感心し……。長い間かかって工夫されてきた、大和の家。わが家のチビがよろこんではしゃぎ回っている。

昭和56年11月15日 大和郡山市（坂下氏）
古い家でそのままむかしの家がのこって、いいと思います。いまとぜんぜんちがうこともびっくりしました。

昭和56年11月15日 大和郡山市（末吉氏）
むかしの家は、きばかりでつくってあるので

びっくりしました。

昭和56年11月20日 大和郡山市（今津氏）
母と昔はなしをしながら見学しました。きれいに保存されていておどろきました。子供達に今度は、私が昔ばなしをしながら、又、来たいと思います。主人もいっしょに。

昭和56年11月22日 八尾市（川野氏、他）
今日は、みんなで来ました。私の家も鳥取の方の田舎の家です。私の家を思い出す様なたたずまい。自分のお母さんが出て来る様な気がします。母の、父の顔が見えなかったのが残念に思います。

昭和56年12月5日 奈良市（佐々木氏、他）
皆さん同様、住んでみたいけど……。仮に実現したら、冬は少し寒いみたい。建具の間隔が……。広すぎてストーブでは……。僕ら二人では広すぎて広すぎて、ねえ。そうそう、コンセントはどこだったっけ!?

昭和56年12月6日 下市町（松谷氏）
私は始めて此の家に来て、本当に幸福であると思います。主人と兄夫婦と4人で来ました。此の大きい家—日本の姿であります。気も心もやすらぎに思います。やはり日本人です。何時迄も此の家があり、何時迄も現在の人間に知らせて下さい（又、来ます）。

昭和56年12月11日 三重県（服倍氏）

屋根葺道具(その1)

奥野義雄

— とくに枋板葺の諸道具を中心に —

柳田国男の「家と住心地」という論考に次のような枋板葺きの記述がみられる。すなわち、

家を建てる材料の問題に就いては、今迄も可なり苦勞をし又迷った。さうして衣食のように機會に恵まれて居ない。併し大體からいふと、日本のやうに植物のよく繁茂する國で、木萱を主として使ったのは自然であり、又選擇の餘地の無いことであつた。

(中略)。最初に屋根を葺く方法からいふと、是が無暗に人の手を掛けさせるものであつた。板葺きはちょうど今日のぶりき屋根と同じに、最も單純な思ひ付きであつただけで無く、損所を補修することも容易なやうであるが、それは只板の價が極めて安かつた場合の話である。枋板の工藝が出来ただけ木を薄くそぎ、追々に又其形を小さくしたことは經濟にもかなひ、且つ作業にも便である上、それを葺き重ねたところは美觀でもあつたが、それだけに手数は多くかつた。釘で打ち付けると割れ腐り、石で押へると滑り落ち、それを横木で留めると雪が卸しにくくなる。おまけに風に損じ火に却かされる。(下略)。

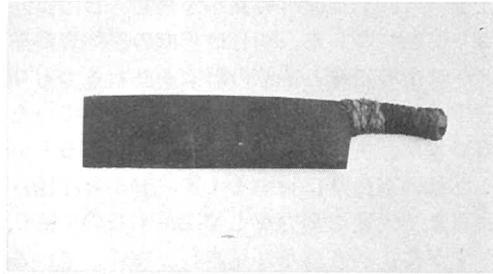
とあるのがそれで(傍線—奥野)どの地方による枋板葺のことは明確ではないが、長文に亘つた後半部分には枋板葺の長短と手間のかかる仕事であることが明示されている(「明治大正史」、『定本柳田国男集』第24卷所収)。

このような枋板葺の仕事は、当県十津川村で聞き取りしたかぎりでも柳田翁が明示しているごとく、手数の多くかかるものであつたことがわかる。

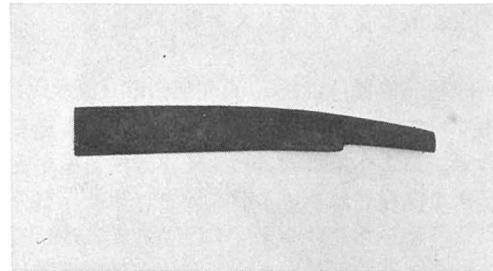
このことは、枋板葺の屋根を仕上げる諸道具によつても理解し得るのではないかと思う。

すなわち皮剥きかわむ・小割りの包丁とセンと木槌と竹釘が枋板葺の屋根葺職人の諸道具であり、美觀を持った葺き方をするか、否かはその職人の腕にかかつていたといえる。

屋根に葺くべき枋板は、大小二種類あるが、輪切りにした杉材を柁目に沿って大きく四つ



▲皮剥き包丁(割包丁か)



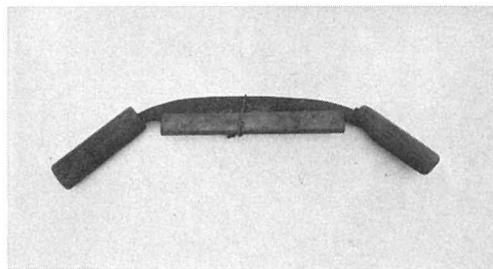
▲皮剥き包丁(割包丁か)



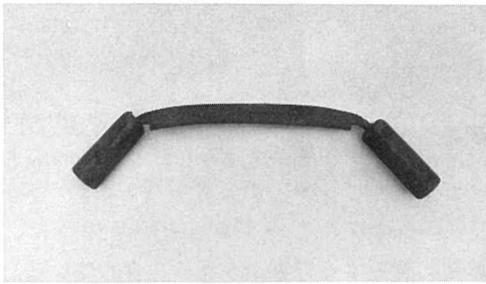
▲小割り包丁



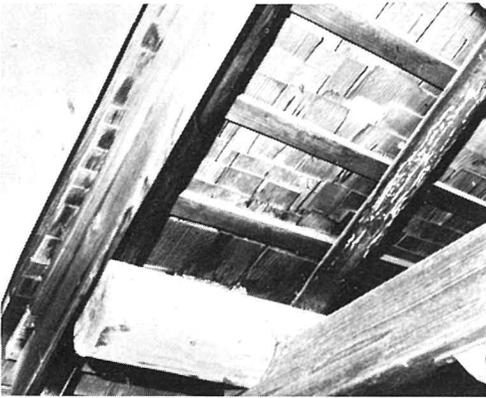
▲小割り包丁



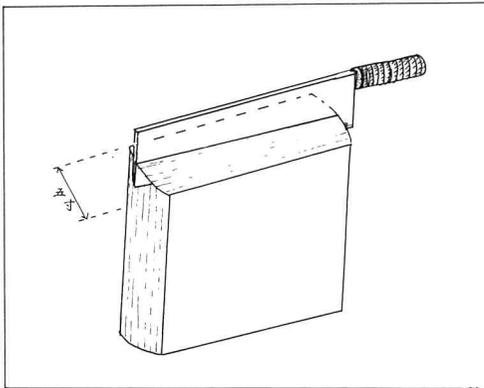
▲セ ン



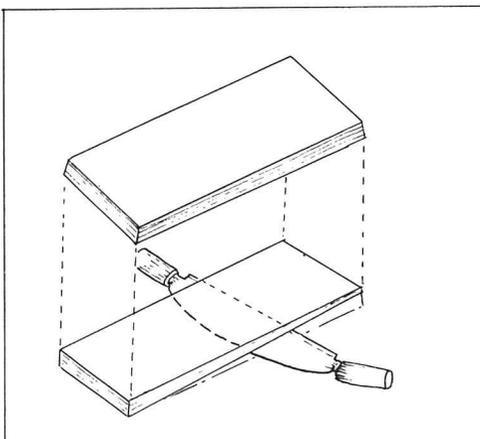
▲セ ン



▲ 粉板葺屋根の裏側



▲ 桁目に板を割っていく(図1)



▲ 軒付板の後部を削る(図2)

割にした後、やや小ぶりの皮剥き包丁かわじでより細目の板=粉板に仕上げていくのである(聞き取りによるかぎり、桁目に沿って刃を入れると細目の板を作っていくのは容易であるという)。

仕上がった粉板を屋根葺に使うのであるが、葺き方は、まず軒先の方から始めるが、ここに使用する粉板は小形のものであり、軒先部分には厚みを付けるため7~8枚程重ねて、この部分が出来上ると順次屋根の棟の方へと粉板を葺いていくのである(付図1~2を参照)。この軒先部分の粉板(軒付板という)は小形であるが、それ以外は大形(長さが小形のものに比べて二倍程で、巾は大小同じ程度)の粉板(平葺板という)で、厚さは大小いずれも0.4cm前後程のものである。

また軒先部分に重ねる粉板の先端部そろを揃えると共に、重ね合わせる後方部の板の厚みを屋根の傾斜を見ながら削り取って一枚ずつに竹釘を打ちつけていくのである。この粉板の厚みをとるときにセンを使うのである。

当館の館藏品(本年度の新収藏品)に、この粉板の屋根葺職人の道具があるが、竹クギ・木槌を除いた皮剥き包丁・小割包丁(4点)とセン(2点)と大小の粉板(若干)を収集している。

しかし、現在十津川村谷瀬には粉板の屋根葺職人は存在せず、この粉板葺の技術伝承がかるうじて現存しているだけである。

したがって、十津川村谷瀬の山家の特色を顕わす粉板葺の職人の動向と変遷を辿る手掛りは、他の地域の粉板の屋根葺職人についての伝承を追うことによって得られるように思うが、昭和30年前後に木に関する職人の姿は、この地域では消滅してしまったようである。そして、粉板の屋根のほとんどがトタンに覆われて、本来の粉板葺の外観を窺うことはできない。しかし、この屋根葺職人に関する技術伝承者は十津川村全域には、いまだ遺っていることも聞き及んでいるという。このことから、他地域での聞き取りにまちたい。これらの点と、藁葺及び萱葺の職人については次回で考えていくことにしたい。

(1982. 5. 9丁)



レンゾとオコモリ

浦西 勉

農耕、特に稲作は、自然（地形、天候や気温など）によって左右されるため、むかしの百姓の知恵の中には、自然に対する感覚は大変すぐれていたようである。水口まつりのツツジの花や、オッキョウカ（旧4月8日）のフジの花、五日節供のショウブなど、季節の草花を使用する行為は、自然に対するすぐれた感覚の表われであると解釈できる。

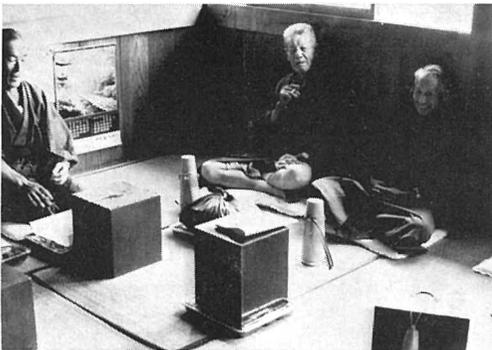
稲作は、自然に左右されるため、粃まきの日や田植の日など、全国统一した日を定めることができない。その土地に一番適した日を選んで行なうのである。このころの稲作に関連のある行事が、ばらばら（特に行事の日）のようにみえるのは、そのためである。農耕文化は、今日のように国民の祝日という全国统一のような性質のものではなかったのである。このころの行事は、やはりその土地における稲作と自然との関係を充分、視野に入れて眺めてみなければならない。

かつての農村において、一番忙がしい時期は4月から6月にかけての田植の準備から田植の間と、10月から12月にかけての収穫から脱穀の時であろう。このころの行事は、大変忙がしいため、どちらかと言えば農閑期にあたる、正月行事や、盆行事のように、何日間も行事にたづさわるものは、確かに少ない。しかし、粃まきから田植じまいの間には、小さな行事であるが、バラエターに富んだものがある。たとえば、ミナクチマツリ（ミトマ

ツリ）、レンゾ、ダケノボリ、オッキョウカ、ノガミ、サビラケ、サナブリ、ウエツケゴモリ、ムシオクル、ハゲショというように、農耕に関連する行事がかなり存在している。このシリーズでも、すでにダケノボリ（通巻3号）、サビラケ、サナブリ（通巻8号）、ノガミ（通巻25号）、ムシオクリ（通巻16号）などを紹介した。これらの行事は、農耕をする人々にとって田植に対する信仰であったように思う。田植という行為は収穫と同様、大変重要なものであったにちがいないと思う。粃から苗、苗から稲へ、そしてその稲に実が付き米になるという、今日からみると何でもないことが古い時代の人々には、これらの行為はただの労働によって行なわれているのではなく、何かの威力がそなわって、行なわれていると思ったのであった。たとえば、山の神が、田の神となり春には山からおりてくると信じたように。そしてその田の神が、無事に稲ができるようにしたと信じたように。

* * *

粃まきは、東山中、宇陀山中、吉野川筋では、早いところで4月10日から20日ごろまでになされ、平坦部では八十八夜（5月2日）ごろまでに粃がまかれた。粃をまいて、田植までの、約1ヵ月半の間（5月上旬から6月中旬頃まで）裏作（麦やナタネ）の刈り入れを終え、すぐ田植のできるように耕作するという多忙な日が続く。この間に、県内で見られるまとまった行事は、ノガミマツリ、ダケノボリ、レンゾ、と呼ばれる行事である。ノガミマツリは5月5日か6月5日に行なわれることが多く、ダケノボリは、4月下旬から5月上旬に多い。またレンゾは、3月下旬から5月中頃まで、自然と密接に結びついている稲作の性質をよくあらわして各地でまちまちである。ざっとならべてみても法隆寺レンゾ（3月22日法隆寺会式）、文殊さんレンゾ（2月25日文殊会式）、節供レンゾ（旧3月3日桃の節供）、大和さんレンゾ（4月1日大和神社ちゃんちゃん祭）、薬師さんレンゾ（3月30日～4



▲「オコモリ」（山添村毛原）

月5日薬師寺会式)、神武さんレンゾ(4月3日神武祭)、三輪レンゾ(4月9日大神神社大祭)、多座レンゾ(4月20日多神社大祭)、大師さんレンゾ(4月21日)、恵美寿さんレンゾ(4月23日)、矢田レンゾ(4月23日・24日矢田山練供養)、八十八夜レンゾ(5月2日)お釈加さんレンゾ(旧4月8日)、久米レンゾ(5月3日久米会式)、九十八夜レンゾ^{注①}(5月12日)、当麻レンゾ(5月14日)、がある。その他まだまだあるが、上にあげただけでも、レンゾと呼ばれる日がいかに多いかがわかる。それぞれの地方において、都合の良い日が選ばれているのである。つまり、農作業にとりかかる日がそれぞれの地方によって、異にしていたのである。

レンゾという日は、農村にとって全く一日休日である。親戚や、嫁入りしたものは婿や子といっしょに里帰りする日であった。神社の大祭や、寺院の会式の日がレンゾと呼ばれるのは、あとから結びついたもので、本来は農耕前に一日休んですごす日なのであった。

なぜ、農耕前に一日休まねばならなかったのだろうか。これから強度の農作業が待ちうけているので、そのため英気を養う意味もあるだろうが、このレンゾの日をよくみると、それだけではなさそうである。まず、親戚(この場合、本家から分かれた家が多い)や嫁入りしたものとその子が、なぜ里に帰って集まるのであろうか。また、単に家で休むのではなく親戚一同が、近くの山や川など、家外に出て遊ぶ場合が多いのである。レンゾの日に外へ出て遊ぶことが、神社や寺院の行事の見学と結びつきやすくなる要素になったのであろう。前者の疑問の親戚が集まるというというのは、かつての農耕のあり方が、集団の労力を要したためとも考えられるが、その親戚一同が山や川へとゆくのは、どうしたわけであろう。このレンゾの内容は、村中こぞってダケの山(神野山や二上山など)へ登るダケノボリの風習と同内容であると考えられる。

なぜ、近くの山や川へ、家族や親戚がこぞって、弁当を持ち集まったのであろうか。古い時代の農耕生活を想像するしかないが、私はこれは、「オコモリ」の習俗が存在していたように思う。田植作業に入る前に、村人が

「オコモリ」をする風習があったのではないかと想像する。なぜ「オコモリ」をしなければならなかったか。それは、稲作に物理的に必要な水と大いに関係がある気がする。水でなくても、稲を成長させる自然の威力に対して、農民の祈りが、「オコモリ」に存在しているような気がする。古い時代のレンゾは、それぞれ、そういう自然への威力のありそうな場所、水と関係のありそうな場所に、一同が集まって「オコモリ」がなされたのではなからうか。田植前(5月末頃)に奈良市押熊^{注②}では宮の境内で「オコモリ」をするのは、あきらかに田植前に「オコモリ」の風習があったことを想像させられる。

* * *

田植前に「オコモリ」があったと考えたが、田植の終わった頃にも、村中で「オコモリ」する例は、県内各地に残っている(特に山添村など多く残っている行事)。ケカケゴモリ、ウエツケゴモリと言って、田植の終わった6月下旬に、氏神にて一日「オコモリ」をするのである。行事といって特に何も無いが、一日氏神の会所で食事をしたり、寝たりするだけの行事であるが、田植前の「オコモリ」と田植後の「オコモリ」との存在は、田植という作業は、単に労働するだけでなく、身を清めた神事であるかのような気がする。農耕という作業は自然の威力なしではなしえないことを、むかしの農民は充分知りつくしていたのであろう。

注① 岩井宏実著『近畿の歳時習俗「奈良」』
362ページ(昭和51年3月刊)

注② 『平城村史』344ページ(昭和46年11月刊)



▲久米レンゾの久米会式

苧績み

大宮守人

今日の衣生活では、衣料は自作せず購入して着ることが圧倒的に多い。また衣料の素材である糸までも自ら作るというのは、さらに少ないことであろう。

昔からの代表的な繊維としては、絹・麻・木綿があげられるが、現在県内に残る伝統的な手法による織布技術として、江戸時代初期頃から明治・大正の頃まで盛んに行われた奈良晒の流れをくむ麻織りの素材である麻糸つくりの伝承技術を調査・収録する機会を持ったので、ここに紹介したいと思う。

麻糸つくり(手紡糸)は、苧績みと呼ばれ、ヌキ(緯糸)作りとカセ(経糸)作りに分けられる。現在県内では経糸に関する苧績みの技術伝承は絶えてしまっており、今回写真収録できたのは緯糸の技術である。

1) 材料 昔は苧麻(カラムシ・アオソともいうイラクサ科の多年草)であったが、今日では栽培や加工効率の良い大麻(クワ科の1年草)に変わっており、群馬県産のものを使っている。

2) 材料の準備 オモト(大麻の白皮を束ねたもの)を1把(140匁)を6つに分けてタワセル(束ねる)を1把(浅い器)に入れ、真水の流水に1時間ほど晒す。さらに、白水(米の研ぎ汁か糠を入れた水)に3時間ほど漬けておく。次に白水から揚げ、両手で堅く搾る。次に束ねを解き、90cm×30cm程の木綿布に三つ折りにして1束ずつ包み込み、嫁と二人がかりで強く搾る。

3) 陰干し 包んだ布からオモトを出し、右端からほぐすように揉んだあと、縁側の軒裏に釣った竹棹に掛けて広げ、陰干しにする(天気であれば1日、梅雨時などでは2日間)。

4) 抜き 干したオモトはコキバシ(扱箸)で抜く。コキバシは、約5cm×φ1cmの竹管2本に苧を通し、両端を玉結びにして、中折れ可能な状態にしたものであり、右手の親指と人差指で挟んで使用する。

5) 苧績み 充分に扱いて軟かくしたオモトを、右小指の爪を使って細く裂き、左手中指(ベニサシ指)で時計方向(S字縫り)に撚ってつなぐ。

なお、小指で細く裂く前に、オサキ(苧裂き?)を使って束から適当な分量だけ取り分けるが、用具は使わず足の指でする人もあったという。つないだ糸は順次オモケ(竹カゴや桶などに渋紙を貼った器)に入れてゆく。

6) 包み 1把分を終えると、オモケの上へ紙を乗せて器をさかさまにして麻糸を全部出し、その上へまた紙を置いて紐で十文字にくくる。この状態で間屋へ納品する。

以上が「ヌキ」の工程で、「カセ」は、さらにヨリカケやカセヨミ(長さを測る)工程があり、苧績みも精緻でなければ経糸として使えなかったという。

昔、室津はカセドコロ、深川(文枝さんの里)はヌキドコロといった。又、織り専門のところはオリドコロといわれ、農閑期の仕事として一定していたということである。

(調査協力者
中尾文枝さん(明治30年生)山添村室津)



▲オサキ(1升瓶)を使う中尾文枝さん

★★★★ お知らせ ★★★★★

民俗博物館の行事予定

☆⁵⁷ 4月8日～9月12日

テーマ展「日々の暮らしシリーズ薬と生活」

☆⁵⁷ 6月20日～9月22日

民俗文化財速報展「町屋の民具」(仮称)

⁵⁷ 9月23日～12月28日

民俗文化財速報展「祈願・授与小絵馬」(仮称)

☆⁵⁷ 6月6日 体験学習講座<チマキつくり>

☆⁵⁷ 7月31日～8月1日 体験学習講座・特集<初歩のはたおり>

☆⁵⁷ 9月26日 体験学習講座<ナベツカミつくり>

☆⁵⁷ 5月16日～6月27日 民俗カルチャー講座の民俗コースⅠを開講しております。

●コース・テーマ▷民衆の食生活を探る

^{5/16} 陶・磁器の普及 巽 淳一郎氏

^{5/30} 江戸時代の食べ物 岸田 定雄氏

^{5/13} 中世の雑器を掘る 稲垣 晋也氏

^{5/7} 木簡にみる古代の食べ物 鬼頭清明氏

※各講座はいずれも往復ハガキによる応募制にしていますので、詳しくは、当館の各講座の担当者へお問い合わせ下さい。

☆予告：民俗カルチャー講座・民俗コースⅡ(仏教と民俗の接点を探るⅠ)は10月17日～11月21日開講。受付期間は9月25日～10月9日です。

【表紙解説】 「たはらがさね耕作絵巻」の田起しの図で、絵巻が製作されたと推定されている室町時代末から江戸時代初頭の農耕具の形態が窺える。

■編集後記■

暖かい日差しから一変して、初夏を想わせる熱い太陽が空にはえる六月初め。移り気な空天も、今は初夏へと衣替えしつつある。

一年目を迎え、これから博物館をより一層リッチに展開させようと意欲に燃えた旧次長と、広報課勤務の経歴を持ちその手腕を博物館でいかしてもらえらる新次長との交替が終わって、早や三カ月目。もう公園には花の彩りが陽炎の中で熱く映る。水と陽と栄養を吸収した草花と同様に、博物館も一つ一つ成長していかねばならない。何か一つでも欠けることのないような環境づくりの途に……。

(★)